



信頼関係の大切さ

SHIEN 日記の連載が始まり早くも1年以上が経ち、これまで、入社オリエンテーション、ビザ手続き、生活相談、学校支援を題材に取り上げてきました。「さて今回は何を話題にしようか」と考えをめぐらせているうちに、どんな内容の支援をしても常に自分がある心構えをもって研究員に向かい合っていることにふと気づきました。それは、「とにかく彼らの話を聞く、彼らの立場に立ってみる」ということです。

SHIEN で受ける相談事、悩み事は多種多様です。「母国で発行された運転免許証を持っているが、日本で車を運転するにはどうしたらよいか?」といった具体的な相談で情報さえ得られれば回答は一つというようなものがある一方、そうあっさりといかないものもあります。後者は研究員と一緒に解決方法を模索していくケースも出てきます。そんな時には、まず彼らの話をじっくり聞くことにしているのです。例えば……

「上の子が小学校に、下の子が幼稚園になんとか入れて、安心して夫婦揃って ATR で研究活動が始められましたが、もうすぐ夏休みになってしまいます。そうなれば一日中子供達の世話が必要になります。仕事を続けるにはどうしたらよいのでしょうか?」、数カ月間の日本滞在の間での入園・入学だったため、いつも以上に時間をかけて教育委員会などに事前に話をつけ、幼稚園・小学校側と面談や見学もし、やっと入園・入学にこぎつけたケースでした。

調べてみると、小学生を対象に学童保育所*という公的サービスがあることが分かりました。「これはいける!」と思ったのも束の間、両親であるこの研究員が住む地域では、役場の説明によると、夏休みの間学童保育所に通うには、普段から通っていることが条件だったのです。研究員たちにこのことを説明し、ベビーシッターを利用してはどうかと提案してみました。ところが、お母さんは「息子はうまく友達もでき、小学校での生活が本当に楽しそうです。ベビーシッターを頼むよりも、ぜひそのサービスを利用したいのです。特別に入れないでしょうか?」と熱心に頼むのです。お兄ちゃんである息子さんが入学前の面談と校内見学で、他の児童たちに囲まれひたすらどぎまぎしていた姿、とまどいもなく無邪気にはしゃぐ妹とは対照的だった光景が、私の頭をよぎりました。お母さんが熱心になる気持ちは手に取るようによく分かり、私は、役場にもう一度お願いしてみることがこの家族には必要だ、と感じたのです。日本語がわからなくてもあつという間に小学校に順応して楽しんでいる子供を見て、母親が強く希望していることを説明し、「無理は承知ですがそこを何とか…」とお願いしてみると、「そういう事情でしたら」と特別に利用許可を出してもらえたのです。

しかし、両親の希望はこれで終わりではありませんでした。「出来れば下の娘もお兄ちゃんと同じ学童保育所で過ごさせたいのです。一緒に参加することは出来ないでしょうか? 二人は何をするにも一緒です。一緒にいることは、彼らをよりリラックスさせるのです」。でも彼女の年齢はまだ5歳半で、前述の通り日本の幼稚園に通っています。「気持ちはよく分かりますが、小学生対象のサービスなのでそれは無理でしょう。」と言う私に、「娘は母国では小学校に入る年齢なので、決して他の児童の迷惑にはなりませんから。尋ねてみてくれませんか?」と答えるのです。「これまでずいぶん無理を聞いてもらっていますが、今度は難しいと思いますよ。」と話し、役場にこの希望を訴えてみたものの、さすがにこちらはかないませんでした。

結果として、私の支援は両親の希望を全てかなえたわけではありませんでした。ですが、うまくいかなかった娘さんのケースについても、彼らはすんなりとその結果を受け入れました。よく話を聞き、一緒に悩み、解決策を探すというプロセスを経て出た結果だからそうなったのでしょうか。

ただ単に求められる情報を右から左に提供するだけでなく、支援のプロセスを大切にしよう心がけています。そこから、研究員との信頼関係が生まれるのだと思います。

SHIEN 辰巳 真起子

*共働き等で昼間留守家庭の児童を放課後や春・夏・冬休みの休暇期間、終日預かる所